

水環境・海域(1) (1-B-9-1～1-B-10-2)

本セッションでは、水環境・海域を対象とした6件の講演発表がなされた。9-1, 9-2 は長期間に渡る沿岸域の水質変動について論じた発表であった。9-2, 9-3 は東京湾の水質全般について短期と長期の変動を報告した。9-2, 10-1, 10-2 は排出源と潮汐流の関係が沿岸域の水質に与える影響について論じた。9-3, 9-4 は都市域の内湾で夏季の成層と貧酸素水塊に関わる講演であった。9-1 は、高度経済成長期以前からの水質の富栄養化とその後の水質保全活動による貧栄養化について、瀬戸内海における長期間の水質データを解析した結果、特にリンの減少が著しいことを取り上げそれが生態系に与える影響を論じた。さらに底質中のリンの変化については今後の課題を提示した。9-2 は、東京湾湾奥の京浜運河における水質変動を、潮汐リズムに応じて解析した試みであった。運河に注ぐ2つの水再生センターからの排水がこの水域の水質(NH₄-N, 塩分濃度, DTN, DTP, DOC)に大きく影響し、潮汐流とともに東京湾内に排出されてゆく過程を報じた。9-3 は、東京湾全域の公共水域水質測定結果に対してトレンド成分のみを抽出することで、約30年間にわたる東京湾の水質変動を評価した。潮位差が減少していること、密度差が増加していることが明らかになり、その結果夏季の成層が強まり、外洋との水の交換が悪くなっていることを指摘した。また9-2 で発表された小水域の水質が東京湾全域に及ぼす影響を示唆するデータが提示されたことも興味深い。9-4 は現在の博多湾、特に湾奥部が抱える貧酸素水塊の問題をはじめ、物理・化学・生物学的な問題について演者らが報告してきた多くの成果をレビューした後、博多湾の夏季の密度成層と人工構造物設置による破壊過程をとりあげ、現地調査と水理実験による結果を交えつつ発表した。10-1 は河川から感潮域を経て河口域へ至る土砂および栄養塩の流出を2年間に渡る観測結果とモデルを使って解析した試みであった。面源から流出したSSや懸濁態C,N,Pは河口域までいったん流出し、そこで窒素やリンの多くを放出した後、潮汐によって逆流して感潮域に堆積していることを指摘した。10-2 は面源からのPAHs負荷が広島湾に降下する際、降雨による影響が大きいこと、降下後は海域の流況に応じて分布している現況を報告した。

(国立環境研究所 矢部 徹)